

# the People

元気なまちには 元気な主張を続け  
元気に行動する 市民がいる

the people (ザ・ピープル)  
2011年 8月発行

発行：特定非営利活動法人 ザ・ピープル  
代表者：吉田 恵美子  
所在地：福島県いわき市小名浜字本町11-1  
まちづくりステーション小名浜内  
TEL/FAX：0246-52-2511  
E-mail：the-people@email.plala.or.jp  
URL：http://www.iwaki-j.com/people/

## 災害救援から復興支援へ 小名浜地区ボランティアセンター再始動！

本会では、3.11大震災後、(社)いわき市社会福祉協議会の「いわき市災害救援ボランティアセンター」の傘下に加わり「いわき市小名浜地区災害ボランティアセンター」を4月19日に立ち上げました。そして、これまでに全国各地から3800名を越えるボランティアの方々において頂き、津波被災地のガレキ撤去、津波泥除き、引越し手伝いなど被災者の方々からの様々な依頼にお応えして来しました。その対応件数は600件を越えました。



そして、その1件1件の作業現場で、依頼者の方とボランティアの方々との心温まる出会いがあり、交流が生まれたとの報告がありました。



センタースタートから3ヶ月となった7月18日には、地域内でのガレキ撤去といった作業ニーズへの対応に一定の収束が見られたことから、一旦「災害ボランティアセンター」の看板を下ろし、活動を休止してきました。そして、今後は、被災者の方々の生活再建に向けたお手伝いに力を入れていく必要があることから、名称を「小名浜地区復興支援ボランティアセンター」と変更して再始動することとしました。同時に施設の引越しも行い、下記の住所に連絡先等も変更しております。

こちらのセンターも、いわき市社会福祉協議会が設ける「いわき市復興支援ボランティアセンター」の小名浜支部サテライトとして機能することになります。そして、社会福祉協議会小名浜地区センターや包括支援センター等福祉の専門チームとの協力体制も作りながら、被災者支援サロンの開設や復興支援イベントの開催といった事業を進めていくことにしています。

福島県内では、福島第一原発事故の影響で原発立地地域である双葉郡各町村から避難してられる方々が、各地の仮設住宅や借上げ住宅等に住み始め、慣れない場所での生活をスタートさせています。その数は、いわき市内では最終的に30000人程度にまで達するだろうといわれています。それらの方々をそれぞれのコミュニティの中にどのように迎え入れたらよいか、ということが今後大きな課題になっていくと思います。



小名浜地区にも数多くの方々が入ってきておられます。津波による直接的な被災者の方々と共に、そういった原発関連の被災者の方々に対しても手を差し伸べることの出来るセンターとなることを目指して、これからが活動の本番を迎えようとしています。

センターの活動第1弾として、8月23日からは熊本県の九州看護

福祉大学の学生ボランティアの皆さんを迎え入れて、津波被災地の居住状況調査や仮設住宅集会所でのケアイベント開催などが催されています。また、9月1日からは、小名浜地区内の県営雇用促進住宅3箇所の集会所を会場とする支援サロンが12回/月のペースで催されることが決定しています。求められるボランティアの内容はこれまでと変化していますが、まだ



まだ必要です。

皆様も、ボランティアの仲間として是非力をお貸しください。  
いわき市小名浜地区復興支援ボランティアセンター  
事務所 〒971-8164 福島県いわき市小名浜寺廻町1-10  
TEL/FAX 0246-92-4298  
http://onahama-volunteer.jimdo.com/

未曾有の東日本大震災。福島県に  
とっては、地震、大津波、原発問題とそ  
れに伴う風評被害。まさにメッタ打ちと  
表現する位の大災害となっていました。  
▼私自身、5歳の孫を含む親戚8人で取  
り敢えず息子の住む茨城県美浦町に避難  
した。もちろん家族の一員である4匹の  
犬と5羽の小鳥も一緒。さすがに鶏の  
「ウコッケイ」だけは連れて行く訳にい  
かずに遠野町の知人に預けた。▼避難し  
ていても、いわきの状況が気になっ  
て方なかつた。結局1週間家族3人だけ  
は帰省した。その間、避難を勧められ  
た本会の理事長とは、毎日連絡を取り合  
った。食料品ばかりでなく生活用品もガ  
ソリンも手に入らなくなり、状況はド  
ンどん厳しさを増していることが分  
「今一番必要なものは何」と聞くとお爺  
さんのリハビリ用パンツ。どこにも売  
てない。ガソリンも買えないので、や  
たら動き回れないとのこと。「任して  
いるから」と早速次の日から買い出し  
に走った。大きな旅行用トランクと大  
なりユックサックと大きな袋2つに野菜  
食パン、リハビリパンツ等を入れるだけ  
め込んだ。▼美浦を朝6時のバスに乗り  
東京駅発9時の高速バスに乗り込めば  
いわき迄の3時間はグッスリ。到着する  
バス停で知人に荷物を預けとんぼ返り。  
それでも宿舎の美浦に着くのは夜8時過  
ぎ。次の日は又買い出しに。結局一日置  
きに、いわきに3回通ったが不思議に疲  
れは感じなかった。理事長が「それって  
避難じゃなくて、買い出しじゃない」と  
涙声で言った言葉が忘れられない。そ  
れにしても、背中にリュックサック、両手  
に袋、そしてトランクを押して歩くのは  
結構難しい。八重州口は改修工事中で歩  
きづらかったから時々よろける。今思  
出すにも笑ってしまう格好だった。戦  
中の買い出しもこんな風だったのかも  
れないと思うと胸が熱くなった。▼とこ  
ろで、帰省2回目の朝、バスに乗り込む  
際、同年輩ぐらいの隣のご婦人に「いわ  
きのどちらですか」と話しかけた。湯本  
に住む母親が心配で行ってみたいとの  
こと。「お菓子では腹の足しにならないの  
ね」と。その声がどうも気になって恐  
る。「私17年生まれなんですけど。」と  
すると彼女「高校は警女ですか。」ときた。  
「ヤダー同級生じゃないの。」お互いこ  
んな形で会えるなんて不思議とばかり、  
いわき迄の3時間お喋り通し。いわきに  
近づき「あなたお菓子じゃお母さんの腹  
の足しにならないでしょう。食パンとカ  
ボチャと大根お餅分けるわね」と差し  
上げる。これも震災のお蔭、良き思い出が  
出来たと呟いた私だった。(K)

つばき  
出会い ①